

# 陶町歴史ロマン 4



## 3 古代

### (1) 弥生時代、古墳時代

時代は弥生時代に移りますが、この時代の遺跡は、東濃地方でもわずかしがなく、瑞浪市では土岐町と釜戸町に「弥生遺跡ではないか？」という発見があったのみです。

しかし、古墳時代の遺跡（古墳）となると非常に多くの古墳が発見されています。

特に瑞浪市では県下最大の荒神塚古墳（明世町）があります。古墳時代中期（5世紀頃）に大和朝廷から派遣されたこの地方の支配者の墓だと考えられています。

『瑞浪の昔話』では、この墓の主は美山彦といい、現地の人に新しい農具を紹介したり、食糧の保存方法を教えたりしたと記しています。

その大きさ（墳丘の直系が57m、高さ9m、墳丘以外を含めると？）から、可見からの東濃一帯のみならず、木曾の方までを支配下においたと考えられています。

古墳時代も後期になると、墳径が10m程度の円古墳がほとんどとなります。

瑞浪市では、この古墳数が184基も発見されており、恵那市郡の140基、土岐市郡の50基、中津川市の50基を大きく上回っています。このことは、荒神塚の時代以降しばらくの間、瑞浪が東濃地方の中心地（支配者に力があつたということ）であつたことを物語っています。

なぜ、瑞浪が東濃地方の中心だったのでしょうか。それは、後にできる主要道「東山道」「鎌倉街道」「中山道」すべてが、瑞浪市を通っていることから分かるように交通の要所だったからです。

まだ現代のようなトンネル掘り、橋かけなど土木技術がない時代でしたので、道は山越えが多くなり、目的地へ直線的でした。したがって、時の中心地である近畿地方から東方への道（信州、関東への道）は、美濃を通り、木曾川を渡って当地を通り、中津川から木曾へ入り信州へ、または神坂峠の山越えで伊那へ入る道（東山道）があつたようです。大和朝廷からは優秀な役人・武人が東国の支配に派遣され、この道を通って赴任するとともに、この地にも派遣されたと考えられます。



荒神塚古墳（戸狩）

瑞浪市内で多く発見されている古墳ですが、山深い陶、大湫には古墳が発見されていません。しかし、古墳がないから陶に人がいなかったということではなく、古墳を作るような力のある支配者がいなかったということです。

つまり、十数人単位の共同集落はいくつかあったが、山深いゆえ、弥生文化（稲作、鉄製の道具など）に乗り遅れた地は、縄文以来の生活が長く続き、侵略されることも、侵略することもなかったのでムラになる必要がなかった（支配者不要）のではと思います。または、支配者はいたかもしれませんが生産性の低い陶では現地支配者は不要で、その人は近隣の別の地の人であった（この説の方が有力で、別の地とは恵那地方）と思います。

山深い陶といえども、時代の流れは着実に押し寄せました。

縄文時代、小里川を上って沢の尻あたりに住み着いた人は、日本が弥生時代に入ってもしばらくの間、狩猟中心の生活をしていましたが、大陸から伝わった新しい農機具、農耕技術の弥生文化は東へ東へと伝わってゆき、恵那から山岡へ、そして陶にも伝わったと思われま

す。というのは、もう少し後の律令制の時代（700年頃）に、陶は淡気郷（たむけごう、現在の恵那市南部）に入っているからです。陶は、東濃の支配者の墓、荒神塚古墳の地（土岐郡）から直線距離で10Km以内にもかかわらず、近い土岐郡ではなく、遠い恵那郡に入っているのです。なぜでしょうか？

それは、大和朝廷が国造りのために役人、武人を東濃（瑞浪）に派遣する以前に、すでに陶は、恵那地方の豪族の支配下であったのではと考えられます。この豪族は大陸から伝わった新しい技術や弥生文化をいち早く取り入れ、農業生産性を上げ、力を付け、周りの小集落に技術、文化を伝える代わりに支配下に置いていったと思います。

陶の地には、人は縄文時代に瑞浪方向から入ったが、弥生の文化は恵那方向から入ってきたと思われま

## (2) 飛鳥時代

大和朝廷が聖徳太子のもとで、国の体裁を整えていくのが飛鳥時代です。

（有名な17条憲法は604年制定）

そして、大化の改新（645年）を経て律令制の国家が形成されてゆきます。その頃の書物に「恵奈（えな…恵那）」「磯杵（とき…土岐）」の記述があります。

飛鳥遺跡の木簡に「天武6年（677年）、美濃土岐郡から次米（すきまい）が届いた。恵那の里長阿利麻が約30kgを献上した。」との記述があります。次米とは、天皇が新嘗祭に用いる特別な米です。恵那の地が米どころだったことがうかがえます。やはり恵那地方はいち早く弥生文化を取り入れ、優秀な米生産地だったのでしょう。



ただ、恵那は淡気（たむけ）の端、陶の地まで、その文化がどの程度届いていたかは？

### (3)奈良・平安時代

律令国家が形をなし、東濃地方は恵奈六郷と土岐六郷の二つの郡がありました。

恵奈六郷とは①淡気（たむけ）②安岐（あぎ）③絵上（えのかみ）④絵下（えのした）⑤坂本⑥竹折です。



土岐六郷とは①土岐②駅屋（うまや）③日吉④餘部（あまりべ）⑤楯原（ならはら）⑥たじ味です。

陶は恵奈郡の淡気郷に属しています。淡気郷は、ほぼ恵那市の正家以南と陶町です。

陶中校歌の二番を思い出してください。

- ♪陶のさかえもかぐわしく
- ♪ますみの磁器のつやつやに
- ♪恵那の郡（こおり）の淡気郷
- ♪ふる

きゆかりに磨きゆく

♪ 我らの誇り 陶中学

校歌に歌われているのです。

淡気には恵那市の正家と山岡（小学校の南）に寺があつて、二つの寺を中心に形成されていました。このうち山岡にはたむけが手向け（花をたむけるのたむけ）となり、手向（とうげ）となり下手向、上手向の地名が残っているのです。

但し、上記の「古代恵奈郡」の地図をよく見ると水上・大川は淡気郷ではなく、土岐郡の餘部（あまりべ）に属していたかもしれません。と、すると陶中校歌の二番の歌詞は陶の中学校としてはふさわしくないことになるけど…

というのは、水上・大川は戦国時代には土岐氏一族の小里領だったのですから。淡気に属していれば遠山一族の領に属するのが自然の流れだと思うからです。ちなみに猿爪は、幕末まで明智遠



山岡廃寺（手向廃寺）

山領に属しています。

この時代の陶を想像してみますと、『瑞浪市の歴史』では、土岐郡を中心に 200～250 戸、陶にも数戸と書いてありますので、5～6 戸があったと思います。

ただ、この時代（戸長中心の共同生活）の 1 戸は現在世帯数では 5～6 戸にあたるので、現在の 20～30 世帯、100 人弱の人が住んでいたと思われます。

但し、律令制度の根幹である口分田の支給があったかは？ 口分田ではなく恵那地方から入った人が指導し、山を開墾し、農業中心の生活をしたと考えるのが妥当かと思われます。

やがて律令制が崩れ荘園の時代になり、陶は遠山荘に属します。（猿爪だけかも）遠山荘は非常に大きく、現在の恵那市、中津川市の大部分、瑞浪市の一部が入ります。当初は撰家領でしたが、後に近衛家領となり、平安末期には源頼朝より頼朝が伊豆で挙兵した時から一緒に戦った加藤景廉が拝領し、その息子景朝が遠山姓を名乗り初代地頭となりました。

また、平安末期になると武士が台頭し、源頼光の系統が代々美濃守として東下し瑞浪市土岐町あたりを本拠に勢力を築きます。光信の時、土岐氏を名乗り、源氏として鎌倉幕府成立にも尽力しています。先に述べた遠山氏は地頭なので美濃の守土岐氏の下ということになります。

この辺りには、平安時代の有名な遺物がふたつあります。

土岐町の桜堂薬師と山岡町の飯高観音です。このふたつについて考察してみたいと思います。

### ①桜堂薬師

『瑞浪市の歴史』によると

「桜堂薬師の創建は弘仁 3 年（812）、嵯峨天皇の勅願により三諦上人覚祐が開山したのが始まりと伝えられています。開山年は比叡山や高野山より早く当時は日本三山の 1 つに数えられるなど寺運が隆盛し最盛期には境内には七堂伽藍が建ち並び 36 房が峰山山中に軒を連ねていたそうです。」とありますが、私は？がつかます。



日本三山のひとつとありますが、ほかのふたつの比叡山、高野山と比べて、その隆盛にあまりにも差があること。比叡山の最澄、高野山の空海に比し三諦上人覚祐は知名度があまりに低いこと。（ネットの検索でもヒットしない）また、比叡山は桓武天皇の庇護があり、高野山は嵯峨天皇の庇護があったとされています。すると嵯峨天皇は日本三山のうち二つに関わることになる。以上の点から私は？

しかしながら、平安初期に立派なお寺が建立されたことは事実で、朝廷にとってこの地

方が非常に重要な地域であったことは間違いありません。

## ②飯高観音

『え～な恵那』によると

「日本三大観音の一つで、山岡町の妙法山萬勝寺に祭られている。厄除け、災難除けの観音さまとして、近郷の尊信を集め、東濃地方で初詣といえは「飯高観音さん」と名が挙がるほど、この辺りでは有名。本尊は千手観世音菩薩で天台宗四祖（比叡山三世）慈覚大師の作と伝えられ、出身の東国へと下る道すがら、幾度もこの辺りを通ったことが想像できる。」とあります。



慈覚大師（794年～864年）は入唐八家（最澄・空海・常暁・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡）の一人で、遣唐使として渡った高僧である。下野の国の生まれ。

慈覚大師円仁が開山したり再興したりしたと伝わる寺は関東に 209 寺、東北に 331 寺余あるとされる。浅草の浅草寺もそのひとつだそうである。

そんな高僧が、東山道とは少しばかり離れた山岡の地に立派な仏像を残したのは？

当時の地名「淡気」は手向け（たむけ）とも書きます。現在、山岡町の上手向（かみとうげ）、下手向（しもとうげ）は、この淡気の地域を円で考えると、その中心点に位置しています。

先に述べたように、恵那の正家にある廃寺と山岡にある手向廃寺の二つの寺は淡気郷の中心だったのでしょう。

実際、かなり後の話しですが、太閤検地（天正年間）で石高を見ますと、上手向 708 石、下手向 383 石、その近隣の久保原 540 石、釜屋 456 石とあり、上手向・下手向はそれより大きそうな岩村 828 石、大井村 512 石と遜色ありません。ちなみに猿爪 240 石、水上 173 石、大川 176 石で大差があります。

つまり、朝廷は桜堂薬師同様にこの地域を非常に重要視しており、朝廷より庇護の厚かった天台宗の僧侶、円仁が朝廷支配の象徴として観音像を寄贈したのではと考えられます。

飯高観音のある萬勝寺は、当初は天台宗の寺院でしたが戦国の頃、武田の軍勢に焼き払われ荒廃してしまいます。その後、明智遠山氏の再興の祖、遠山利景により再興し臨濟宗に改宗しました。